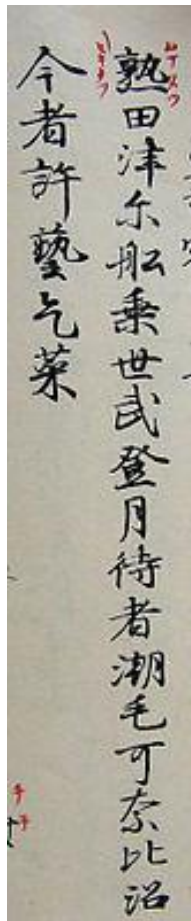


正史を彷徨う

二十一章 継体天皇紀までに現れる地名

森隆一



額田王の歌(左)と(女装)万葉仮名文木簡(右) (Wikipedia より)

21. 継体天皇紀までに現れる地名

序

日本書紀の神武天皇紀から継体天皇紀までを眺めてきた。

全ての文を理解できてはいないが、大筋のかなりの部分は把握できたのではないかと我が田に水を流しているが、作業仮説をたてられない状況である。本稿の立場からは、近畿攻略の過程が描けていない状況である。

ここで固有名詞の出現を調べることにした。19章で陵と宮について、20章で皇后・皇子皇女の系図を作成した。本章では、固有名詞のうち地名を扱っていく。

記紀の地名に関しては二重性を感じている。すなわち、征服した地域に以前いた所の名前を付けたのではないか、ということである。アメリカでは New ***、日本でも、北海道では北〇〇、関東では東〇〇という地名が見られる。また、関連する事蹟も移せば、故地での歴史の抹消となり得る。

なお、引用文を 16pt から 14pt に変更し、訳を逆に 14pt から 16pt に変更した。

21.1. 古事記と日本書紀

古事記は上中下の3巻から成り、上巻は神代、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までが書かれているが、時代が下がるほど記述が少ない。

古事記と日本書紀の違いについては、議論できる程古事記を見ていないので、初期印象として、感じたことを挙げ、できれば、問題点を見つけていきたい。

まずは、記述が物語風と編年体である。古事記のほうが万葉仮名に近い気がする。成立は古事記が712年で日本書紀が720年で漢字表記が変遷するような差はない。

古事記は推古天皇紀、日本書紀は持統天皇紀で終わっている。何か意図があるのであろうか。

古事記は日本書紀のプロトタイプとして作成されたと思はしたが、疑問に思っている。他には、似てはいるが、編纂過程にあったものを中間報告的なものとしてまとめたものが古事記であるとも考えられる。これを前文と編年体の天皇記にしあげたものが日本書紀とすれば、完成時期の8年の差は理解できる。あるいは、古事記作成の過程で正史に習って編年体で作成することになったのではないかと考えられる。

古事記には 此七字以音 という音読みの注意が多く見られる。これは、訓読みが行われていたことを示すのではないか、あるいは、漢字の仮名使用に関して統一化が試みられていたのではないかと考えられる。

本稿の立場からは、まず話のリストを作成することを考えるが、これは、かなりの文の理解が必要となる気がする。次に登場人物を加えていくことだろうか。これらから、異なる内容や書き方を見つけ、考察していくことになると思う。現実的なのは、日本書紀の記事を古事記ではどう書いているのかを調べる程度だろうが、このような記事は日本書紀でも取り挙げていない。まずは、日本書紀の物語的部分を読み進むことである。

推古天皇紀は、日本書紀では 1 巻を割り当てられていて、文字数は 9210 文字であるが、古事記では

豊御食炊屋比賣命 坐小治田宮 治天下參拾漆歳 御陵在大野岡上 後遷科長大陵也
と書かれているだけであるのも、ここまでを対象とすると解釈できる。

推古天皇の在位期間は 593 年から 628 年で、崩御記紀成立時の 100 年ほど前のことである。

ここで、推古天皇記までの文字数を表にしたものが、表 21.1 天皇紀の文字数 である。前に述べたように、ここでの文字数は維基文庫のテキストで調べたものである。ここでは、本来はない句読点が入れられていて、

これらも含めた文字数である。

表 21.1 天皇紀の文字数

	神武	綏靖	安寧	懿徳	孝昭	孝安	孝霊	孝元	開化
古事記	3,640	71	236	159	197	111	432	611	1,158
日本書紀	6,629	692	389	337	343	310	376	417	409
比	1.8	9.7	1.6	2.1	1.7	2.8	0.9	0.7	0.4
	崇神	垂仁	景行	成務	仲哀	神功	応神	仁徳	履中
古事記	1,738	3,007	4,192	127	164	1,762	4,546	3,216	970
日本書紀	4,112	5,968	7,739	482	1,644	7,509	4,484	7,565	2,478
比	2.4	2.0	1.8	3.8	10.0	4.3	1.0	2.4	2.6
	反正	允恭	安康	雄略	清寧	顕宗	仁賢	武烈	継体
古事記	141	1,571	1,285	2,836	910	799	134	106	511
日本書紀	289	3,940	1,017	10,243	1,256	3,879	1,559	1,981	6,539
比	2.0	2.5	0.8	3.6	1.4	4.9	11.6	18.7	12.8
	安閑	宣化	欽明	敏達	用明	崇峻	推古		
古事記	41	152	390	373	151	26	39		
日本書紀	1,913	776	15,210	4,533	1,526	2,437	9,210		
比	46.7	5.1	39.0	12.2	10.1	93.7	236.2		

尊称は省略した。また、比は日本書紀の文字数を古事記の文字数で割ったものである。

全体では、古事記の文字数の合計は 35,802、日本書紀は 118,191 で比は 3.3 である。

神武天皇から開化天皇では、 6,615、 9,902、 1.5

崇神天皇から履中天皇では、 19,722、 41,981、 2.1

反正天皇から継体天皇では、 8,293、 30,703、 3.7

安閑天皇から推古天皇では、 1,172、 35,605、 30.4

これは

これからは、神武天皇から履中天皇までは、古事記に手直し程度で出来、安閑天皇から推古天皇までは古事記では殆ど出来ていなかったといえる。

また、比が1を割り込んでいるのは、孝靈天皇記、孝元天皇紀、開化天皇、安康天皇の4巻である。この違いも興味ある所である。特に、開化天皇は0.4と半分以下になっている。これは、何人かの皇子皇女が除かれたことになる。

21.2. 記紀の漢字の読み（森博達説＋藤井游惟修正）

固有名詞を考えるとき、漢字の読みが問題となることは明らかである。地名説話は訓読みがなければ多くのものが成り立たなくなると思われる。漢字の読については、9章序で扱った。

9章での Wikipedia「万葉仮名」の引用は概要のみである。ここで、万葉仮名の歴史を引用する。（なお、Wikipediaは随時更新されていて、下記引用は現在のものとはかなり異なっている。）

万葉集や日本書紀に現れた表記のあり方は整っており、万葉仮名がいつ生まれたのかということは疑問であった。

万葉仮名の最も古い資料と言えるのは、5世紀の稻荷山古墳から発見された金錯銘鉄剣である。辛亥年(471年)の製作として、第21代雄略天皇に推定される名獲加多支鹵大王やその皇居斯鬼宮、日本神話の登場人物で四道将軍の1人の大彦命に推定される意富比埜を始祖として、鉄剣の製作者とある乎獲居臣に至る8代の系譜があり、それらの人名や地名を表記する文字が刻まれている。5世紀には江田船山古墳出土銀錯銘大刀にも、獲加多支鹵大王、无利豆、伊太和という字音表記がある。但し隅田八幡神社人物画像鏡の製作年の癸未年が443年(503年説も有力)で、かつ日本製(百濟製説も有力)だった場合、意柴沙加宮、斯麻、開中費直の字音表記が最古の資料となる。これらも漢字の音を借りた万葉仮名的一种とされる。漢字の音を借りて固有

語を表記する方法は5世紀には確立していた事になる。

これ以後、実際の使用が確かめられる資料のうち最古のものは、大阪市中央区の難波宮跡において発掘された652年以前の木簡である。皮留久佐乃皮斯米之刀斯と和歌の冒頭と見られる11文字が記されている。正倉院に遺された文書や木簡資料の発掘などにより万葉仮名は7世紀頃には成立したとされている。

なお Wikipedia 「万葉集」 から

奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する最古の和歌集である。

第1期は、舒明天皇即位(629年)から壬申の乱(672年)までで、代表的な歌人としては額田王がよく知られている。ほかに舒明天皇・天智天皇・有間皇子・鏡王女・藤原鎌足らの歌もある。

第2期は、遷都(710年)までで、代表は、柿本人麻呂・高市黒人・長意貴麻呂である。ほかには天武天皇・持統天皇・大津皇子・大伯皇女・志貴皇子などである。

第3期は、733年(天平5年)までで、個性的な歌が生み出された時期である。代表的歌人は、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、高橋虫麻呂、坂上郎女などである。

第4期は、759年(天平宝字3年)までで、代表歌人は大伴家持・笠郎女・大伴坂上郎女・橘諸兄・中臣宅守・狭野弟上娘子・湯原王などである。

ということで、万葉集の成立は、記紀の成立より数十年後ということになる。舒明天皇は推古天皇の次の天皇である。

万葉仮名の最も古い資料とされている稲荷山古墳から発見された金錯銘鉄剣である 471 年のものを万葉仮名としている。奈良時代末期に成立したとみられる萬葉集に用いられている仮名に含まれるかどうか。万葉集に用いられていることから、それ以前に成立したとしか結論できない。成立に関してはわからない。

万葉仮名を万葉集に用いられているものとするれば、金錯銘鉄剣のものが萬葉集で用いられていることを確認する必要がある。

もう一つは、万葉仮名という用語は魅力を感じるので、(万葉集に多く用いられている)日本語の(漢音・呉音による)漢字表記とする。この立場からは、正史の倭条における人名なども含まれる可能性が残る。

三国志は撰者の陳寿の没年である 297 年までには成立した。1145 年完成した三国史記では倭人の名は今のところ見出していない。

万葉仮名と訓読みとどちらが先か。感覚的には万葉仮名のほうが前にできたと思われるが正しいのか。

読みについてネット・サーフィンしているうちに

[「日本書紀の音読みに関して、白村江敗戦と上代特殊仮名遣い」](#) >

[「日本漢字 「呉音」の原型は山東方言音」](#)

というサイトを見つけた。これは、作者の藤井游惟氏による著書「白村江

敗戦と上代特殊仮名遣い」の要約ウェブサイトということである。恐らく、考察の部分を省略し、結論的なものを書く章ごとに編集したものと思われる。この内容は充分理解できていないが、大筋と思われる部分を引用する。

日本語に於ける漢字の発音は、主として呉音と漢音という 2 種類の発音体系があるが、日本古代史・日本語史の根本資料である記紀万葉に於いて、日本語音写に用いられている漢字の発音体系は呉音である。

通説・俗説においては、日本の呉音は、中国の 8 世紀頃の漢音の原型となった発音をよりも古い時代の発音を模倣したもの、あるいは倭王朝と交流のあった中国の呉地方にあった南朝(宋・済)に於ける発音を原型・模倣したものなどと言われているが、これらの説には言語学的根拠は全くない。

結論から言えば、日本呉音の直接の原型は朝鮮音(百済音)であり、その朝鮮音の原型は楽浪方言音、さらに楽浪方言音の原型は、黄海を挟んだ朝鮮半島の対岸にある山東半島沿海部方言であると思われる。

中国語学者の森博達氏による日本書紀区分論、即ち漢文体で書かれた日本書紀 30 巻を漢文の正確さという観点で分類すると、正格漢文体で書かれた α 群と、漢文としての誤用・奇用の多い β 群に分けることができ、正格漢文の α 群を書いたのは 660 年の百済滅亡の際に、倭に救援を求める百済遺臣が手みやげとして献上した唐人俘虜の中にいた、薩弘恪・続守言らの中国人であった、という説は知る人も多いであろう。

森博達による日本書紀の区分

α 群：14(雄略)-21(用明・崇峻)、24(皇極)-27(天智)

β 群：1-13(允恭・安康)、22(推古)-23(舒明)、28-29(聖武)

(第30(推古)巻はどちらに属するか不明としている)

また、森博達氏は日本書紀に収録されている歌謡や訓注の、借音仮名に於ける日本語表記を分析し、 α 群の借音仮名は中国原音(西北音 \div 唐代長安音 \div 中原が音)に基づくのに対し、 β 群は倭音(日本式発音)で書かれているとしている。

森氏の「日本書紀区分論」「日本書紀 α 群中国人記述説」は学界では高く評価され、現在では半ば定説化しており、森氏とは異なる筆者独自の方法を用いた分析に於いても、日本書紀 α 群を書いたのは中国人であったことは確認できる。

続いて、藤井游惟氏による修正が書かれている。群への分割は変更がなく、 α 群の原音にさらなる考察を加えたという印象である。

日本書紀の α 群と対応する古事記の天皇紀、 β 群と対応する古事記の天皇紀での対応から何か言えるか。どちらかに差が多いか、あるいは、無関係か。このテーマの考察は現在の筆者の能力を超えるもので、当面は手を付けられない。

「白村江敗戦と上代特殊仮名遣い」の引用を続けていく。

本稿前半の朝鮮語及び中国各地方言音による万葉集の発音実験から、日本呉音の

原型は朝鮮音(百濟音)、朝鮮音の原型は山東音ということには納得頂けたと思う。

筆者説では、万葉集を書いたのは朝鮮語話者(百濟人)であるが、朝鮮語話者が書いたものを山東方言話者が読んでもかなり日本語に近く聞こえるということは、日本書紀 α 群を書いた薩弘恪・続守言らが山東人であるならば、日本書紀 α 群に収録されている日本語の歌を山東方言話者に読ませてみれば、もっと日本語に近く聞こえるはずである。

古事記・日本書紀は歌謡集ではないが、古事記には 112 首、日本書紀には 128 首の借音仮名で書かれた歌謡が収録されており、記紀歌謡と呼ばれるが、うち 40~50 首が重複している。但し、日本書紀に収録されている 128 首の歌謡の大半は β 群にあり、中国人記述とされる α 群にあるのは 10 数首に過ぎず、うち古事記と重複しているのは 4 首のみである。そこで、この 4 首を山東方言音、朝鮮音、及び日本呉音で発音して比較する実験を行ってみた。これらから推定される元となる日本語の発音と歌の意味は写真の下の通りである。

ここで、上記発音の比較動画がリンクされている。

さて、日本書紀 α 群を除く記紀万葉等の日本語音写には、中国音韻学に照らして呉音とも漢音とも呼べない特殊な発音をしたと思われる漢字が幾つか存在し、それらは古韓音と呼ばれている。日本以外でのこれら古韓音の用例は、主として異民族言語の人名・地名などの音写だそうである。

従来、古韓音は、切韻系統の韻書が成立する遙か以前の、紀元前の周代、漢代の古い発音、上古音、の名残り、というのが一般的な見解であったが、筆者は古韓音は山

東方言音を原型としつつも、楽浪郡で独自の発達を遂げた楽浪方言音ではないかと考える。

以上興味深い例や論証を省略して、引用した。

森博達による日本書紀の区分は

α 群 正格漢文体 中国原音(西北音 \div 唐代長安音 \div 中原が音)

β 群 誤用奇用が多い 倭音(日本式発音)

α 群：14(雄略)-21(用明・崇峻)、24(皇極)-27(天智)

β 群：1-13(允恭・安康)、22(推古)-23(舒明)、28-29(聖武)

(第30(推古)巻はどちらに属するか不明としている)

となる。

藤井游惟氏は、上の右を、

α 群：山東方言音

β 群：古韓音 \div 楽浪方言音

としている。時期に依るが、魏以降は帯方郡が置かれ、その南に韓・倭があった。

森博達説＋藤井游惟修正は、日本書紀が、ちゃんとした中国語の部分よと、なんちゃって中国語の部分に分けられ、前者は14(雄略)-21(用明・崇

峻)、24(皇極)-27(天智)で山東方言音、残りは古韓音≡楽浪方言音とするものである。この説は、大筋として、本稿と合い入れあうものと想っている。

また、発音の比較動画は面白い試みである。古代船の復元に匹敵する試みの可能性も考えられる。人名や地名にも同様に行えば、古代船の復元よりも遥かに大きな結果が得られる可能性を秘めている。

三国史記にも同様の事が言えるのか。古韓音で三国史記の地名・人名、記紀の朝鮮の地名、百済・新羅の人名を読んだ結果も興味ある。記紀と三国史記の朗読ができれば面白いが、今後可能であろうか。また。古事記はどうであろうか。

古韓音≡楽浪方言音において用語として疑問が残る。本稿の立場からは、韓と楽浪郡とは異なる地域である。古韓音を三韓(百済と新羅)とその南に接する倭としたい。

朝鮮という国は、箕子朝鮮と衛氏朝鮮、李氏朝鮮しかない。衛氏朝鮮はBC108年に滅びた。その版図は現在の北朝鮮内と思われるが、高句麗の成立前のことであるから、満州南東部も含まれるかもしれない。

衛氏朝鮮が滅びたBC108年から、李氏朝鮮が成立した1392年まで1500年程離れている。この間は朝鮮王は存在しない。

韓については、箕子朝鮮の最後の王準が衛満に追われ、韓王と称した。これからは、朝鮮と韓は並立する国であったことになり、地域としては異なる。

この他には、韓王は現れない。いいかえれば、韓という国はない。馬韓では辰王が現れる。

百済ができたのは、330年以降で、660年には滅びた。百済の帰化人(渡来人)は間違いではないであろうが、百済が滅びたことから、亡命者というのが適切と考える。

Wikipedia「李氏朝鮮」

1392年から1897年(大韓帝国として1910年まで存続)にかけて朝鮮半島に存在した国家で有る。王朝名としては李朝。李氏朝鮮は李家支配下の朝鮮の意味であり、過去に朝鮮の国号を使用した箕子朝鮮や衛氏朝鮮などとの区別のため呼称される。大韓民国では朝鮮王朝とも呼ばれ、近年の日本でも同様に呼称する場合がある。なお、北朝鮮では朝鮮封建王朝と呼ばれる。李朝は歴史の順番によって高麗の次の王朝にあたり、朝鮮民族国家の最後の王朝で、現在までのところ朝鮮半島における最後の統一国家である。

1392年に高麗の武将李成桂太祖(女真族ともいわれる)が高麗王・恭讓王を廃して、自ら権知高麗国事(高麗王代理、実質的な高麗王の意味)になり即位を自称したことで成立した。前政権を否定するために高麗の国教の仏教を否定する崇儒排仏で儒教

が国教化された。李成桂は翌 1393 年に中国の明から権知朝鮮国事(朝鮮王代理、実質的な朝鮮王の意味)に正式に封ぜられた。朝鮮という国号は李成桂が明の皇帝洪武帝から下賜されたものであり、権知高麗国事から正式に明に朝鮮国王として冊封を受けたのは第 3 代太宗の治世の 1401 年であった。中国の王朝が明から清に変わった 17 世紀以降も、引き続き李氏朝鮮は 1894 年まで中国王朝の冊封体制下にあった。

朝鮮半島には封建領主は出現していない。李氏朝鮮が唯一の封建領主であったかもしれない。

21.3. 継体天皇紀までに現れる地名

日本書紀の神武天皇紀から継体天皇紀までに書かれている国内の地名をリストアップしてみた。

表の右端の推定所在地は、原則として、市町村とした。Wikipediaの記事に書かれているもの以外は、Googleで検索して、感覚でそこそこのものを選び、引用した。疑わしさの強いものには(?)を付した。

国に付いては、原則として、書かないことにした。

できれば、各表ごとにメモ・感想を書いていきたい。これまでに取り挙げた記事も多いが、重複をいとわず、書いていくことにした。前とは、異なるものもあるかもしれない。

スローガンの的には、単に地名だけでなく、何処で何した、が伺えることを付け加えた。神社の縁起によると思われるものもかなりあった。宇佐神宮で見たように、記紀と関係のない神社の縁起にも興味あるものがあり得るが、デジタルな原資料の入手が問題である。

本稿で扱っている正史は漢文と呼ばれている。

コトバンク「漢文」ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説では古代の漢民族において発達し、現代まで伝承されている漢字による文字言語およびそれで書かれた言語作品。漢文は朝鮮，日本，安南にまで広まり，使用され，言語

作品が作成された。日本には、古く大陸からの渡来者がもたらしたが、次第にその外国語である中国語に返り点、送りがなをつけ、日本語文語文に翻訳しながら読む訓読法が発達し、固定化するようになった。外国の文字言語を自国の文字言語として機能させる際の、一つの独特のやり方である。

百科事典マイペディアの解説では、

漢代の文章の意だが、日本では中国語の語法によって漢字ばかりで書かれた文章の総称。広義には日本語を混じた（ただし漢字のみ）文をも含む。おそらく4—5世紀ごろ輸入された漢文は日本文化の源泉の一つであり、書記活動は漢文を借りて行われた。漢文の読み書きができることが古代貴族・官吏の教養とされた。朝廷の公式の文章には漢文が用いられ、それが変体漢文という文体を生み出した。また漢文の日本語直訳すなわち訓読が行われ、漢文訓読体という日本語の文体を生み、さらに和漢混淆文を生ずるに至る。

と解説されている。

この解説を読んで何故か中国語と呼ぶことが避けられているような気がする。避けるような必要性も感じられないので、疑問のままである。ここで、中国という呼称が原因ではないかと思いついた。何時頃から中国という言葉がつかわれたのであろうか。中華という呼び方もある。中華料理・中国料理では中華料理のほうが馴染みがあると思っている。また、華中という用語もある。何となくではあるが、中華〇〇国のキセル的略語ではないかと思ったこともある。

古くは、漢・呉・唐のように王朝名が中国を指す用語として用いられていた。また、支那という用語もある。デジタル大辞泉では秦に由来すると書かれている。英語の China に音が似ていて、世界的にはこちらのほうが都合が良いのではないかとも思われる。

ということで、漢文は中国語の文章というのは問題がない。これは、漢字が表意文字であることから、読めなくても意味がわかることから言えることでもある。

話は逸れるが、ちんぷんかんぷんを珍文漢文と思ってきたが、違っていて、珍紛漢紛のようである。(語源由来辞典「ちんぷんかんぷん」)

正統な漢文という用語を何処かで見た記憶がある。正統でない漢文とは何か。恐らく、中国語と言えるものと言えないもの。中国語と言えないものは、文法に合っていないものと訓読みを伴うものが考えられる。規則的と規則正しいのように、正(正しい)を付けた用語が多く見られる。不規則は、規則的でないではなく、規則正しくではないという意味のようである。

神武天皇紀

表 21.2. 神武天皇紀に現れる地名

神武天皇	神日本磐余彦天皇	
前文	(年十五立爲太子)	
	娶日向國吾田邑吾平津媛	日南市
45歳 10月	至速吸之門	豊予海峡
	行至筑紫國菟狹	宇佐市
	於菟狹川上 造一柱騰〈一柱騰宮 此云阿斯毘苔徒鞅餓離能瀾椰〉	
11月	至筑紫國崗水門	遠賀川河口
12月	至安藝國 居于埃宮	広島府中町
46歳 3月	徙入吉備國 起行宮以居之 是曰高嶋宮	岡山市
49歳 2月	到難波之碕	大阪市
	3月 遡流而上 至河内國草香邑青雲白肩之津	東大阪市
	4月 皇師勒兵步趣龍田 還更欲東踰膽駒山而入中洲…徼之於孔舍衛坂	斑鳩町
	却至草香津 植盾而 爲雄誥焉 因改號其津曰盾津 今云蓼津訛也	
5月	至茅淳山城水門…時人因號其處曰雄水門 進到于紀伊國竈山	泉南市
6月	軍至名草邑 遂越狹野而到熊神邑	和歌山市
	天皇獨與皇子手研耳命 帥軍而進至熊野荒坂津	新宮市
8月	達于菟田下縣	宇陀市
9月	陟彼菟田高倉山之巔	宇陀市
10月	擊八十梟帥於國見丘破斬之	宇陀市(?)
11・12月	(戦闘記事などに幾つか書かれている)	
50歳	(戦闘記事などに幾つか書かれている)	
元年正月	天皇即帝位於檀原宮 (51歳)	檀原市
2年 2月	賜道臣命宅地居于築坂邑	檀原市
	使大來目居于畝傍山以西川邊之地 今號來目邑	檀原市
	給弟狷猛田邑 因爲猛田縣主	宇陀市(?)
	弟磯城名黑速 爲磯城縣主	三輪町
4年 4月	立靈時於鳥見山中 其地號曰上小野榛原 下小野榛原	
31年 4月	皇與巡幸 因登腋上■間丘	御所市
76年	三月天皇崩于檀原宮 時年百廿七歳 明年秋九月 葬畝傍山東北陵	檀原市

宇陀に至るまでは神武東征の経由地として考察した(11章・18章4節)。ここで、吉野と飛鳥周辺にある数カ所は省略した。1つには、このあたりは物語的な部分が多く、理解できなかったことと、宇陀から西に転戦し、飛鳥地方に橿原宮を築き、即位した程度の理解で本稿では十分と思われることである。倭王朝の大和進出時には、飛鳥より宇陀のほうが生産量が上であったかもしれない。

神武天皇紀では難波之碕とかかれ、経由地である。

表 19.1 で、難波のつく宮と天皇を挙げてみると

難波大隅宮： 応神天皇

難波高津宮： 仁徳天皇

(難波祝津宮)： 欽明天皇

難波宮： 孝徳天皇

難波宮： 聖武天皇

である。允恭天皇の茅渟宮(泉佐野市)も入れてもいいかもしれない。

この他に難波が付くものとして、

難波大郡が欽明天皇記、推古天皇記、舒明天皇記、

難波津が欽明天皇記、推古天皇記、舒明天皇記、皇極天皇紀、孝徳天皇紀が挙げられる。

なお、淡路島(南海道)が書かれているのは、応神天皇紀・履中天皇紀・允恭天皇紀である。

綏靖天皇紀から開化天皇紀までの検討は行っていない。ここでは、崩御時の年齢と皇太子になったときの年齢が書かれている。これから、生誕年での父天皇の年齢や即位時の年齢を推定していく。

神武天皇紀前文に 彦波■武■草葺不合尊第四子・・・年十五立爲太子 長而娶日向國吾田邑吾平津媛 爲妃 生手研耳命。

45歳で、諸兄及子等に東征を宣言した。

元年(52歳)の正月に正妃の媛踏■五十鈴媛命を皇后とした。

生皇子神八井命 神凜名川耳尊 と書かれているから、綏靖天皇は媛踏■五十鈴媛命との間の第2子である。

神武天皇は76年に127歳で崩御した。綏靖天皇は、神武天皇32年に皇太子となり、48歳の年に神武天皇が崩御し、翌年即位した。神武天皇28年に生まれたことになる。神武天皇は52歳で即位したから79歳での子となる。また、綏靖天皇は元年では49歳となる。記事では、33年に84歳で崩御となっている。一方、元年で49歳からは、33年では81歳となる。

安寧天皇は、綏靖天皇25年に21歳で皇太子となり、33年に即位した。綏靖天皇5年53歳での子となる。元年では29歳となる。38年に57歳で崩御と書かれている。

懿徳天皇は、安寧天皇11年に16歳で皇太子となった。安寧天皇元年で

は6歳となる。38年に懿徳天皇は崩御し、翌年即位した。元年では34歳となる。34年に崩御と書かれているから、崩御は67歳となる。

孝昭天皇は、懿徳天皇22年に18歳で皇太子となった。懿徳天皇5年38歳の年に生まれたことになる。34年に懿徳天皇は崩御し翌年即位したから、元年では30歳となる。83年に崩御と書かれているから、崩御は112歳となる。

孝安天皇は、孝昭天皇68年に20歳で皇太子となった。孝昭天皇49年78歳の年に生まれたことになる。83年に孝昭天皇は崩御し、翌年即位した。元年では36歳となる。102年に崩御と書かれているから、崩御は101歳となる。

孝靈天皇は、孝安天皇76年に20歳で皇太子となった。孝安天皇57年92歳の年に生まれたことになる。102年に懿徳天皇は崩御し翌年即位したから、元年では45歳となる。76年に崩御と書かれているから、崩御は120歳となる。

孝元天皇は、孝靈天皇36年に19歳で皇太子となった。孝靈天皇18年62歳の年に生まれたことになる。76年に孝靈天皇は崩御し翌年即位したから、元年では59歳となる。57年に崩御と書かれているから、崩御は117歳となる。

開化天皇は、孝元天皇22年に16歳で皇太子となった。孝元天皇5年63歳の年に生まれたことになる。57年に孝元天皇は崩御し同年に即位した

が、開化天皇元年は翌年になっていて、この時 51 歳となる。60 年に崩御と書かれているから、崩御は 110 歳となる。

綏靖天皇紀から孝安天皇紀

表 21.3. 綏靖天皇紀から孝安天皇紀までに現れる地名

綏靖天皇 元年 4年	神凜名川耳天皇 都葛城 是謂高丘宮 神八井耳命薨即葬于畝傍山北	御所市 橿原市
安寧天皇 元年 10月 2年	磯城津彦玉手看天皇 葬神凜名川耳天皇於倭桃花鳥田丘上陵 遷都於片鹽 是謂浮孔宮	橿原市 大和高田市
懿徳天皇 元年 8月 2年 正月	大日本彦耜友天皇 葬磯城津彦玉手看天皇於畝傍山南御陰井上陵 遷都於輕地 是謂曲峽宮	橿原市 橿原市
孝昭天皇 前文 元年 7月	觀松彦香殖稻天皇 葬大日本彦耜友天皇於畝傍山南織沙谿上陵 遷都於掖上 是謂池心宮	橿原市 御所市
孝安天皇 2年 10月 38年 8月	日本足彦國押人天皇 遷都於室地 是謂秋津嶋宮 葬觀松彦香殖稻天皇于掖上博多山上陵	御所市 御所市

綏靖天皇から開化天皇までは欠史8代と括られている天皇である。記事としては、宮と陵と前章で扱った系譜が書かれているだけである。最後から3人の孝霊天皇・孝元天皇・開化天皇は后妃も3人で系譜だけでは後の天皇とは見分けがつかなかった。

孝霊天皇紀から開化天皇紀

表 21.4. 孝霊天皇紀から開化天皇紀までに現れる地名

孝霊天皇	大日本根子彦太瓊天皇	
前文	葬日本足彦國押人天皇于玉手丘上陵 皇太子遷都於黒田 是謂廬戸宮	御所市 田原本町黒田
孝元天皇	大日本根子彦國牽天皇	
4年 3月	遷都於輕地 是謂境原宮	檀原市
6年 9月	葬大日本根子彦太瓊天皇于片丘馬坂陵	王寺町
開化天皇	稚日本根子彦大日日天皇	
元年 10月	遷都于春日之地 是謂率川宮	奈良市
5年 2月	葬大日本根子彦國牽天皇于劔池嶋上陵	檀原市
60年 4月	天皇崩 10月 葬于春日率川坂本陵	奈良市

今までは、近つ飛鳥を飛鳥、遠つ飛鳥を明日香と表記してきたが、若干の不自然さを感じていたことと、漢字を見なければ区別がつかないこと、

および、近い遠いは視点により変化する。また、一般的に、飛鳥と言え、奈良の飛鳥とする人が殆どで、大阪の近つ飛鳥を思い浮かべる人は少ないであろう。ということで、大阪府側を河内飛鳥、奈良県側を単に飛鳥と呼ぶことにする。

崇神天皇紀

表 21.5. 崇神天皇紀に現れる地名

崇神天皇	御間城入彦五十瓊殖天皇	
3年 9月	遷都於磯城 是謂瑞籬宮	桜井市
7年 2月	天皇乃幸于神淺茅原	桜井市(?)
	8月 即於茅渟縣陶邑得大田田根子	堺市南部から和泉市 東部
8年 4月	以高橋邑人活日爲大神之掌酒	
	12月 開神宮門而幸行之 所謂大田田根子 今三輪君等之始祖也	
10年 9月	以大彥命遣北陸 武渟川別遣東海 吉備津彥遣西道 丹波道主命遣丹波 因以詔之曰。 若有不受教者 乃舉兵伐之 既而共授印綬爲將軍 大彥命到於和珥坂上…一云 大彥命到山背平坂 武埴安彦與妻吾田媛…因以號其山曰那羅山	(四道將軍) 天理市 木津町 八幡市(?)
17年 7月	(詔曰 船者天下之要用也… 其令諸國俾造船舶)	
60年 7月	詔群臣曰 武日照命 從天將來神寶 藏于出雲大神宮 是欲見焉	出雲
62年 7月	今河内狹山埴田水少 10月 造依網池 11月 作苜坂池 反折池	大阪狹山市
65年 7月	任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也 任那者 去筑紫國二千餘里 北阻海以在鷄林之西南	
68年 12月	明年8月 葬于山邊道上陵	天理市

空企画では崇神元年は BC97 年で崩御は BC30 年ある。後漢は 25 年から 220 年である。崇神天皇紀では宮と陵以外の地名が現れる。ここで、崇神天皇 65 年に任那と新羅の都を指す鷄林が現れることは注目される。

語呂合わせ的には、任那と御間城が関係ありそうだが、

ピンイン 御間城: yù jiān/jiàn chéng、任那: èn nà

からはそうではないようである。

ここまでの記事で、磯城という地名が良く現れる。Wikipedia「磯城」には、

磯城とは、奈良盆地の東南部を指す地域の名称。三輪山の西、初瀬川流域までの地域で、現在の磯城郡と桜井市、天理市の一部を指す。志貴・志紀・師木・志癸とも表記する。

と書かれている。

10年9月の記事は、四道将軍の派遣で、北陸・東海・西道・丹波道に派遣された。吉備から見た四道、筑紫から見た四道は何になるだろうか。

65年7月の記事における、任那者 去筑紫國二千餘里 北阻海以在鷄林之西南 は既に考察した。新羅の王都鷄林の西南の島に任那があることになる。

垂仁天皇紀

表 21.6. 垂仁天皇紀に現れる地名

垂仁天皇	活目入彦五十狹茅天皇	
元年 10月	葬御間城天皇於山邊道上陵	天理市
2年 10月	更都於纏向 是謂珠城宮也	桜井市
	是歲 任那人蘇那曷叱智請之 欲歸于國	
	一云御間城天皇之世額有角人 乘一船泊于越國筥飯浦 故號其處曰	敦賀市氣比神社付近
	角鹿…也以歸化之 到于穴門時…	
	向東方 則尋追求 遂遠浮海以入日本國 所求童女者 詣于難波爲比	国東郡 國埼郡
	賣語曾社神 且至豐國國前郡 復爲比賣 語曾社神 並二處見祭焉	
3年 3月	新羅王子天日槍來歸焉…則藏于但馬國常爲神物也	宍粟市
	一云 初天日槍 乘艇泊于播磨國 在於完粟邑…仍詔天日槍曰 播磨	播磨國完粟邑
	國完粟邑 淡路島出淺邑 二邑。汝任意居之…於是 天日槍自菟道	淡路島
	河泝之 北入近江國吾名邑而暫住 復更自近江 經若狹國西到但馬國	菟道河・近江國吾名邑
	則定住處也	經若狹國西到但馬國
5年 10月	天皇幸來目 居於高宮…	(?) 橿原市・福岡市
7年 7月	左右奏言 當麻邑有勇悍士 曰當麻蹶速	葛城市
26年 8月	天皇勅物部十千根大連曰 屢遣使者於出雲國	
	10月 十遷于伊勢國渡遇宮 (?)	
27年 8月	是歲 興屯倉于來目邑	(?) 橿原市・福岡市
28年 11月	葬倭彦命于身狹桃花鳥坂	橿原市
34年 3月	天皇幸山背	山背古道
35年 9月	遣五十瓊敷命于河内國 作高石池 茅渟池	高石市 泉佐野市
	10月 作倭狹城池 及迹見池	奈良市 大和郡山市
39年 10月	五十瓊敷命 居於茅渟菟砥川上宮	阪南市(?)
99年 7月	天皇崩於纏向宮 12月 葬於菅原伏見陵	奈良市

かなり地名が多く、各地に散らばっている。仲哀天皇紀に似ている気がする。

2年10月の記事は任那人の蘇那曷叱智、意富加羅國王子の都怒我阿羅斯等らの話で、18.6節で考察した。角鹿を周防にあったという都怒国とすれば、九州から、瀬戸内海沿岸の記事が主となる。角鹿は仲哀天皇紀にも現れる。

ぴんいん 都怒: dōu nù、角鹿: jiǎo/jué lù

角を訓読みすれば似てなくもない。

また、蘇那曷叱智は崇神天皇65年に任那國が派遣した者。

3年の記事の一書は、播磨國完粟邑と淡路島出淺邑のどちらかを選ぶようにいわれた。この後、菟道河→近江國吾名邑→若狹國→但馬國、と移った。朝鮮からの経路としては、逆のほうが自然である。

8年から25年までは、無かったのか、筆者が読み取れなかったのか。

景行天皇紀（日本武尊を除く）

表 21.7. 景行天皇紀に現れる地名（日本武尊を除く）

景行天皇	大足彦忍代別天皇		
3年	3月	卜幸于紀伊國 居于阿備柏原而祭祀神祇	和歌山市
4年	2月	天皇幸美濃 天皇聞美濃國造 名神骨之女・・而居于泳宮	可児市(?)
	11月	乘輿自美濃還 則更都於纏向 是謂日代宮	桜井市
12年	7月	熊襲反之不朝貢 八月 幸筑紫 九月 到周芳娑麼	防府市
	10月	到碩田國 其地形廣大亦麗 因名碩田也(碩田 此云於保岐陀)	大分郡(?)
		到速見邑・・・茲山有大石窟 曰鼠石窟 有二土蜘蛛 住其石窟	竹田市
		天皇惡之不得進行 即留于來田見邑 權興宮室而居之 以討土蜘蛛	竹田市
		而破于稻葉川上・・・故時人其作海石榴椎之處 曰海石榴市 亦血流之處曰血田也	竹田市 久住町 (桜井市)
	11月	到日向國 起行宮以居之 是謂高屋宮	竹田市 西都市
13年	5月	悉平襲國 因以居於高屋宮 已六年也	西都市・宮崎市・ 肝付町
17年	3月	幸子湯縣 遊于丹裳小野・・・是國也直向於日出方 故號其國曰日向也	宮崎県児湯郡
18年	3月	天皇將向京以巡狩筑紫國 始到夷守 是時於石瀨河邊 人衆聚集	小林市
	4月	到熊縣	熊襲→熊縣→球磨
	5月	從葦北發船到火國	葦北郡
	6月	自高來縣渡玉杵名邑 時殺其處之土蜘蛛津頼焉	高來郡 玉名市
	7月	到筑紫後國御木 居於高田行宮・・・到八女縣	大牟田市
	8月	到的邑而進食	浮羽郡
19年	9月	天皇至自日向	
53年	8月	乘輿幸伊勢 轉入東海	
	10月	至上總國 從海路渡淡水門	
	12月	從東國還之居伊勢也 是謂綺宮	鈴鹿市
54年	9月	自伊勢還於倭居纏向宮	桜井市
57年	9月	造坂手池 即竹蒔其堤上	田原本町
58年	2月	幸近江國 居志賀三歲 是謂高穴穗宮	大津市
60年	11月	天皇崩於高穴穗宮 時年一百六歲	大津市

Wikipedia「淡水門」では

淡は令制国の安房国のこと。律令制以前は阿波国造の領域で後に上掾国阿波評となり、養老2年(718年)に安房国として立国された。古事記伝では安房国と相模国三浦郡御崎との間の海の入口である今日の浦賀水道としているが、大日本地名辞書では房総半島の館山湾としている。この地は古代に東海道を相模国から上総国(安房)へ渡る海上交通の要所として注目されていたことが窺える。

景行天皇紀では多くの地名が記されていることから、日本武尊関連は別表とした。9章でかなりの地名を考察をした。

3年と4年と53年以降に近畿と東海の地名が現れる以外は、九州と周防の地名である。このうち、奈良県の部分は陵のための準備か。

12年から19年の記事は、周防から出発して、大分・宮崎・熊本を征服した話と思われる。

桜井市(纏向・磯城・磐余・泊瀬)に関係する天皇

崇神天皇(磯城瑞籬宮)、垂仁天皇(纏向珠城宮)、

神功皇后(磐余若櫻宮)、履中天皇(磐余稚櫻宮)、雄略天皇(泊瀬朝倉宮)、

武烈天皇(泊瀬列城宮)、継体天皇(泊瀬柴籬宮)、

欽明天皇(磯城嶋金刺宮・泊瀬柴籬宮)、敏達天皇(百濟大井・譯語田幸玉宮)

用明天皇(磐余池邊雙槻宮)、崇峻天皇(倉梯岡陵・倉梯柴垣宮)

大津(滋賀)に関する天皇

成務天皇(志賀高穴穗宮)、天智天皇(山科陵・近江大津宮)、

弘文天皇(長等山陵・近江大津宮)

景行天皇紀（日本武尊）

表 21.8. 景行天皇紀に現れる地名（日本武尊）

日本武尊

27年 10月 遣日本武尊令擊熊襲 時年十六

12月 到於熊襲國

既而從海路還倭 到吉備以渡穴海 其處有惡神 則殺之 亦比至難波

28年 2月 （日本武尊奏平熊襲之狀曰）

40年 6月 （東夷多 邊境騷動）

7月 （天皇詔群卿曰…日本武尊奏言）

10月 日本武尊發路之

枉道拜伊勢神宮…於是倭姬命取草薙劔

是歲 日本武尊初至駿河…故號其處曰燒津 亦進相摸欲往上總

爰日本武尊則從上總轉入陸奥國 從海路迴於葦浦 橫渡玉浦至蝦夷境

蝦夷既平 自日高見國還之 西南歷常陸 至甲斐國 居于酒折宮

日本武尊曰 蝦夷凶首 咸伏其辜 唯信濃國 越國 頗未從化 則自甲斐北轉 歷武藏 上野 西逮于碓日坂

則日本武尊進入信濃 日本武尊更還於尾張 於是聞近江膽吹山有荒神

日本武尊 於是始有痛身 然稍起之還於尾張 爰不入宮簣媛之家 便移伊勢而到尾津

葬於伊勢國能褒野陵 時日本武尊化白鳥 從陵出之 指倭國而飛之

遺使者追尋白鳥 則停於倭琴彈原 仍於其處造陵焉 白鳥飛至河內留

舊市邑 亦其處作陵 故時人號是三陵曰白鳥陵

御所市
羽曳野市

是歲也 天皇踐祚四十三年焉

9.5 節で、北九州から見た東国の話を、近畿から見た東国の話に置き替えた、考えた。九州から見て東国とは、四国の瀬戸内海沿岸 伊

予・阿波 中国 の瀬戸内海沿岸 安芸・吉備 と日本海沿岸の出雲と考える。

17.12 節では、坂東・吉備・筑紫・伊予・周防に総領がおかれたという Wikipedia「総領」の記事を引用した。このうち、文武天皇四年の記事で吉備・筑紫・周防 3 総領の任命に続き、常陸守の任命が書かれている。坂東という用語は聖武天皇の和銅七年の即位に続く一連の記事で初めて現れる。これから、文武天皇四年では坂東総領は無かったと言える。

吉備は神武東征にも現れ、27 年 12 月でも日本武尊の記事として現れている。また、顕宗天皇・仁賢天皇など吉備が関連する記事は数多い。(メインの記事)岡山は山陽道のほぼ中間である。

周防から吉備にかけても吉備から河内に至るのと同様の物語があったはずである。ここで、大和朝廷のうち平城京を都としたものを奈良朝廷とよぶことにする。記紀は奈良朝廷により造られた。周防から吉備に至る時代は、奈良朝廷にとっては、250 年以上前のことであり、直接の影響は殆どなかったのか、あるいは、不都合であったのか、記紀には書かれなかった。

日本武尊と菟道稚郎子は外すことが出来ず、前者は舞台を東海以遠に移され、後者は宇治川の上流に配された。これらは、もう少し考慮したい。

次のことも思いつくが、メモとしておく。

宇佐神宮と熱田神宮、宗像大社と伊勢神宮かと対応させると、是も上の二重性となる。

倭王武の上奏文 東征毛人五十五國 西服眾夷六十六國 渡平海北九十五國
に合う位置は四国である。

成務天皇紀と仲哀天皇記

表 21.9. 成務天皇紀と仲哀天皇記に現れる地名

成務天皇	稚足彦天皇		
2年	11月	葬大足彦天皇於倭國之山邊道上陵	天理市
仲哀天皇	足仲彦天皇		
前文		葬于倭國狹城盾列陵（盾列 此云多多那美）	
2年	2月	幸角鹿 即興行宮而居之 是謂筍飯宮 即月 定淡路屯倉	敦賀市
	3月	天皇巡狩南國…至紀伊國而居于德勒津宮 當是時 熊襲叛之不朝貢 天皇於是將討熊襲國 則自德勒津發之 浮海而幸穴門 即日使遣角鹿 勅皇后曰 便從其津發之 逢於穴門	和歌山市 和歌山 関門海峡 敦賀
	6月	六月 天皇泊于豊浦津 且皇后從角鹿發而行之 到渟田門	関門海峡
	7月	七月 皇后泊豊浦津	
	9月	九月 興宮室于穴門而居之 是謂穴門豊浦宮	下関市
8年	正月	幸筑紫 時岡縣主祖熊鰐 聞天皇之車駕 豫拔取五百枝賢木…奏言 自穴門至向津野大濟爲東門 以名籠屋大濟爲西門 限沒利嶋 阿閉嶋爲御筥 到儼縣 因以居檀日宮	北九州市 長門市 福岡市(香椎宮)
	9月	詔群臣以議討熊襲 時有神託皇后而誨曰 天皇何憂熊襲之不服 是膂完之空國也 豈足舉兵伐乎 愈茲國而有寶國 譬如處女之口 有向津國…便登高岳遙望之	
九年	2月	天皇忽有痛身 而明日崩…於是皇后及大臣武内宿禰 匿天皇之喪 不令知天下 則皇后詔大臣及中臣烏賊津連 大三輪大友主君 物部膽咋 連大伴武以連曰…付武内宿禰 以從海路遷冗門 而殯于豊浦宮 大臣武内宿禰自穴門還之 復奏於皇后	下関市 下関市

成務天皇紀では、景行天皇陵の記事以外は地名が現れない。在位期間60年の天皇としては異常ともいえる。ただし、以武内宿禰爲大臣也 と令諸國 以國郡立造長 縣邑置稻置 以外は、軍事・政務の記事は無い。

仲哀天皇記で、敦賀から和歌山を経て、関門海峡に行くのは、スケールは大きいかもしれないが、実際の話かどうかは疑問が残る。

18.5 節で引用したように、角鹿を周防にあったという都都怒国とすれば、周防灘沿岸が舞台となる。

淳田門: 三方郡の堂神浦と丹生浦の琴引が崎の間の海、広島県豊田郡の青木瀬戸、出雲国盾縫郡沼田郷(今の出雲市北東部)

仲哀天皇 8 年 9 月の記事は気になっていたが、改めてみれば、興味深い。

仲哀天皇は熊襲を討とうとしたが、(どの神かわからないが)神が皇后に、熊襲より愈茲國を討つように告げた。天皇はこれを信ぜず、熊襲を撃ったが、克てなかった。さらに、病にかかり崩じた。(あるいは、矢に当たり崩じた。)

という話である。

まずは、熊襲征伐に皇后を呼び寄せるのは、あり得るのだろうか。疑問の残る九州に行く過程を除いてみれば、九州での話となる。愈茲國はわからないが、新羅が絡むようで、朝鮮の国であろうか。とすれば、北九州平定後、南進し熊襲を撃つ路線と、朝鮮での勢力を維持する路線の対立が考えられる。

仲哀天皇 9 年 10 月の記事が三韓征伐と言われているものと思われる。

Wikipedia「岡田宮」(既出)では、

かつて岡地方(旧遠賀郡)を治めた熊族が洞海菊竹ノ浜(貞元)に祖先神を祀ったのが始まりとされ、そのためにこの地域一帯を熊手と号したといわれる。後、神武天皇が東征(神武東征)の途上に、この地に 1 年間逗留し八所神を祀ったとされ、神武東征にある岡田宮の候補地の一つである。仲哀天皇の時代には恭順した岡県主熊鰐の案内によって、神功皇后が岡田宮の八所神を奉祭したとの記事が日本書紀に載る。

神功皇后紀

表 21.10. 神功皇后紀に現れる地名

神功皇后	氣長足姬尊	
(九年)	2月 足仲彦天皇崩於筑紫檀日宮…更造齋宮於小山田邑	福岡市・古賀市
	3月 皇后選吉日 入齋宮 親爲神主	
	則對曰 於日向國橘小門之水底所居	宮崎市
	皇后欲擊熊鷲 而自檀日宮遷于松峽宮	筑前町
	至層增岐野 卽舉兵擊羽白熊鷲而滅之	夜須町安野
	轉至山門縣	
	4月 北到火前國松浦縣 而進食於玉嶋里小河之側…皇后還詣檀日浦	東松浦郡浜崎玉島町
	解髮臨海曰 吾被神祇之教 賴皇祖之靈 浮涉滄海 躬欲西征	
	10月 從和珥津發之…便到新羅 時隨船潮浪 遠遶國中…於是高麗・百濟	下で
	二國王 聞新羅收圖籍 降於日本國…從今以後 永稱西蕃 不絕朝貢	
	故因以 定内官家屯倉 是所謂之三韓也 皇后從新羅還之	
	12月 生譽田天皇於筑紫 故時人號其産處曰宇瀨也	福岡県宇美町
	於是 從軍神表筒男 中筒男 底筒男 三神誨皇后曰 我荒魂 ……	
	爲祭荒魂之神主 仍祠立於穴門山田邑	下関市
(10年)	2月 皇后領群卿及百寮 移于穴門豐浦宮…則引軍更返 屯於住吉 時皇	下関市
元年	后聞忍熊王起師以待之 命武内宿禰 懷皇子 横出南海 泊于紀伊水	(幾つかの比定地があるが今1つ)
	門 皇后之船 直指難波…於是 天照大神誨之曰 我之荒魂 不可近	
	皇居 當居御心廣田國 卽以山背根子之女葉山媛令祭	御坊市
	會太子於日高 以議及群臣 遂欲攻忍 熊王 更遷小竹宮	
	3月 命武内宿禰 和珥臣祖武振熊 率數萬衆 令擊忍熊王 爰武内宿禰等	京都南部
	選精兵從山背出之 至菟道以屯河北	
	10月 (群臣尊皇后曰皇太后 是年也 太歲辛巳 則爲攝政元年)	
2年	11月 葬天皇於河内國長野陵	藤井寺市
3年	正月 立譽田別皇子 爲皇太子 因以 都於磐余 是謂若櫻宮	桜井市
5年	3月 新羅王遣汗禮斯伐 毛麻利叱智 富羅母智等朝貢…因以 副葛城襲	
	津彦而遣之 共到對馬 宿于鉏海水門	
13年	3月 命武内宿禰 從太子令拜角鹿筥飯大神 太子至自角鹿	
46年	3月 遣斯摩宿禰于卓淳國	
49年	3月 以荒田別 鹿我別爲將軍 則與久氐等 共勒兵而度之 至卓淳國 將襲	
	新羅…(朝鮮半島の地名多数)	
69年	4月 皇太后崩於稚櫻宮 時年一百歲	奈良市
	10月 葬狹城盾列陵	奈良市

9.6 節(or9.7)で幾つかの地名は考察した。

皇后の時代の地名は九州(下関を含めて)である。

いわゆる三韓征伐は仲哀天皇 9 年の 10 月と 11 月に行われた。これは可能なのか。朝鮮半島いたとすれば、無理はないが、九州に居たとすれば、かなり難しいのではないか。これに関連する記事が正史にあるとすれば、三国志正始 6 年 245 の記事 倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、狗邪韓國 である。

仲哀天皇紀と神功皇后紀には多くの地名が現れ、検討しきれていない。気になる記事をメモしておく。

神功皇后元年(仲哀天皇 10 年)の記事の地名

仲哀天皇 9 年 10 月の記事の地名 故因以 定内官家屯倉 是所謂之三韓也

下関(穴門豊浦宮)で摂政となった後は、近畿である。

應神天皇紀

表 21.11. 應神天皇紀に現れる地名

應神天皇	譽田天皇		
前文	一云 初天皇爲太子 行于越國 拜祭角鹿筥飯大神 時		
3年	10月 東蝦夷悉朝貢 即役蝦夷而作厩坂道		下つ道の一部
5年	10月 科伊豆國令造船 長十丈 船既成之 試浮于海 便輕泛疾行如馳 故名其船曰枯野		
6年	2月 天皇幸近江國 至菟道野上而歌之曰…		宇治市
7年	9月 高麗人 百濟人 任那人 新羅人 並來朝 時命武内宿禰 領諸韓人等作池 因以名池號韓人池		田原本町 唐古池
9年	4月 遣武内宿禰於筑紫以監察百姓…武内宿禰 獨大悲之 竊避筑紫浮海以從南海廻之 泊於紀水門		筑紫→南海→紀水門
11年	10月 作劔池 輕池 鹿垣池 厩坂池		橿原市 橿原市?
13年	9月 髮長媛至自日向 便安置於桑津邑…於是天皇西望之 數十麋鹿浮海來之 便入于播磨鹿子水門		大阪市 播磨国 加古の港
16年	8月 遣平群木菟宿禰 的戸田宿禰於加羅		
19年	10月 幸吉野宮		
22年	3月 天皇幸難波居於大隅宮 時妃兄媛侍之…還欲定省 於理灼然 則聽之 仍喚淡路御原之海人八十 人爲水手 送于吉備		大阪市
	4月 兄媛自大津發船而往之 天皇居高臺望兄媛之船以歌曰 阿波辭摩 異椰敷多那羅弭 阿豆枳辭摩 異椰敷多那羅弭 豫呂辭枳辭摩之魔 □ 伽多佐例阿羅智之 吉備那流伊慕□ 阿比瀾菟流慕能		大津はどこか?
	9月 天皇狩于淡路嶋 是嶋者横海在難波之西…天皇便自淡路轉以幸吉備 遊于小豆嶋		
	亦移居於葉田(葉田 此云簸娜)葦守宮		岡山市
31年	8月 詔群卿曰 官船名枯野者 伊豆國所貢之船也…是以諸國一時貢上五百船 悉集於武庫水門		西宮市
41年	2月 天皇崩于明宮 時年一百一十歲 (一云 崩于大隅宮) 惠我藻伏岡陵 是月 阿知使主等自吳至筑紫		羽曳野市

應神天皇紀では、即位の記事に遷都がないことから、即位は桜井市(稚

櫻宮)で行われた。22年に大阪市(大隅宮)への遷都まで、遷都の記事は無い。13年の髪長媛の話は現実的であろうか。22年では、淡路島で狩りをし、小豆島に遊び、岡山市(葉田葦守宮)で居住(遷都)した。

7年の記事にある韓人池は Wikipedia「韓人池」では田原本町の唐古池に比定されていると書かれている。唐子遺跡も同時期に造られたのではないか。本稿では、下つ道のこの辺りは藤原京の造営時期にできたと考察した。

11年の記事のうち、劔池については、孝元天皇劔池嶋上陵は檀原市石川町。他の輕池・鹿垣池・厩坂池は？

9年の記事 筑紫→南海→紀水門 の南海とはどこだろうか。紀水門を和歌山とすれば、四国の南側、すなわち、太平洋とするのが自然である。古代にこの航行が可能であったかは疑問である。南海道からは四国の北岸が妥当であろう。南海道の記事は少ない。これは、攻略が容易であったことによるのではないか。

22年9月の記事の経路 淡路島→吉備→小豆島→葉田葦守宮 は若干不自然さを抱く。吉備を除くか、小豆島→葉田葦守宮は吉備の詳細とすれば、一応、不自然さは無くなる。

また、16.1節で考えたように、行幸の順番を書かれた順と逆にすれば、

葉田葦守宮 → 小豆嶋 → 淡路嶋 → 難波大隅宮

となり、神武東征の吉備と難波の間を埋める自然なルートになる。

前文の‘一云 初天皇爲太子 行于越國’は16.1節で取り挙げなかった。

‘爲’に‘なる’という自動詞的用法があれば、‘天皇が太子になる’と解釈できる。ただし、主語としての天皇は省略されていることに反する。神武天皇紀での例は、以珍彦爲倭國造、立皇子神渟名川耳尊爲皇太子である。応神天皇が皇太子となったのは、神功皇后摂政3年である。今のところ思いつくのは、神功皇后摂政を忘れていたか、あるいは、天皇の記事を神功皇后の記事としたである。

仁徳天皇紀

表 21.12. 仁徳天皇紀に現れる地名

仁徳天皇	大鷦鷯天皇		
前文	(幾つかの地名)		
元年	正月	都難波 是謂高津宮	大阪市
11年	10月	掘宮北之郊原 引南水以入西海 因以號其水曰堀江 又將防北河之 以築茨田堤	大阪市(難)波 寝屋川市
12年	10月	掘大溝於山背栗隈縣以潤田	山城国久世
13年	9月	始立茨田屯倉 因定春米部	河内
	10月	造和珥池 是月 築横野堤	絞れず 大阪市
14年	11月	爲橋於猪甘津 即號其處曰小橋也	大阪市
17年		新羅不朝貢	
30年	9月	皇后遊行紀國到熊野岬…皇后不還猶行之 至山背河而歌曰…更還 山背 興宮室於筒城岡南而居之	京田辺市
	11月	天皇浮江幸山背…明日 乘輿詣于筒城宮	京田辺市
35年	6月	皇后磐之媛命薨於筒城宮	
37年	11月	葬皇后於那羅山	奈良市
38年	7月	…問之 何處鹿也 曰 菟餓野	大阪市(?)
41年	3月	遣紀角宿禰於百濟 始分國郡	
53年		新羅不朝貢	
55年		夷叛之 遣田道令擊 則爲蝦夷所敗 以死于伊寺水門	石巻市
58年	10月	吳國 高麗國並朝貢	
67年	10月	幸河内石津原 以定陵地	堺市
87年	正月	天皇崩 10月 葬于百舌鳥野陵	堺市

仁徳天皇紀では、大阪市(高津宮)に遷都して以降、淀川水系の地名が現れる。京田辺市(筒城宮)での居住(遷都)の後は遷都の記事は無い。ここまでは継体天皇紀の近畿地方での記事と似ている。

詔羣臣曰 朕登高臺以遠望之 烟氣不起於域中 以爲百姓既貧 而家無炊者 したの
は4年の2月で、遠望し、烟氣多起を確認したのは7年4月である。都は
難波高津宮で、上記文からは、城中の百姓が飢えているということである。
高津宮は都城であったことになる。

Wikipedia「高津宮」では、

高津宮は、大阪市中央区にある神社。旧社格は府社で、現在は神社本庁の別表神社。
難波高津宮に遷都した第16代天皇である仁徳天皇を主祭神とし、祖父の仲哀天皇、
祖母の神功皇后、父の応神天皇を左座に、後の葦姫皇后と長子の履中天皇を右座に祀
る。

貞観8年(866年)、清和天皇の勅命により難波高津宮の遺跡が探索され、その地に
社殿を築いて仁徳天皇を祀ったのに始まる。天正11年(1583年)、豊臣秀吉が大坂
城を築城する際、比売古曾神社の境内(現在地)に遷座し、比売古曾神社を当社の地
主神として撰社とした。1872年(明治5年)に府社に列格した。

高津神社の標高は9m程であるが、すぐ西の松屋町筋は4.6m、堺筋4.0m、
御堂筋2.9mと1Km程で本稿で古墳時代の海水面としている4mより下にな
る。松屋町筋の4.6mは海辺の冠水地帯であり、都城があったとは考え
られない。

55 年の記事は夷叛の記事であるので、夷の居る場所が書かれているのは自然であるが、東北はあり得るのか。これ以外は、大阪・堺と山背(久世・京田辺)である。

履中天皇紀・反正天皇紀・允恭天皇紀

表 21.13. 履中天皇紀・反正天皇紀・允恭天皇紀に現れる地名

履中天皇	去來穗別天皇		
前文	太子到河内國埴生坂而醒之 顧望難波 見火光 而大驚 則急馳之 自羽曳野市大坂向倭 至干飛鳥山…對曰 淡路野嶋之海人也		羽曳野市
元年	2月 皇太子即位於磐余稚櫻宮		桜井市
2年	10月 都於磐余 十一月 作磐余池		桜井市
3年	11月 天皇泛兩枝船干磐余市磯池…於是 長真膽連 獨尋花 獲干掖上室 山而獻之 天皇歡其希有 即爲宮名 故謂磐余稚櫻宮		桜井市 桜井市
4年	8月 始之於諸國置國史 記言事達四方志 十月 堀石上溝		天理市
5年	3月 於筑紫所居三神見干宮中言… 9月 天皇狩干淡路嶋 自淡路至		
6年	3月 崩干稚櫻宮 (時年七十) 10月 葬百舌鳥耳原陵		堺市
反正天皇	瑞齒別天皇		
前文	天皇初生干淡路宮		
元年	10月 都於河内丹比 是謂柴籬宮		松原市
五年	正月 天皇崩干正寢		
允恭天皇	雄朝津間稚子宿禰天皇		
前文	(反正?)天皇自岐嶺至於總角 仁惠儉下		
3年	正月 遣使求良醫於新羅		
5年	11月 葬瑞齒別天皇于耳原陵		堺市
8年	2月 幸于藤原		橿原市
9年	2月 幸茅渟宮 8月 幸茅渟 10月 幸茅渟		泉佐野市
10年	正月 幸茅渟		
11年	3月 幸於茅渟宮…先是衣通郎姬居于藤原宮		泉佐野市
14年	9月 天皇獵于淡路嶋		
42年	正月 天皇崩 10月 葬天皇於河内長野原陵		藤井寺市

陵と宮の位置関係では、反正天皇の陵と允恭天皇の陵が入れ替わるのが自然である

この3人の天皇は仁徳天皇と皇后の磐之媛命との子供とされているが、17.2節では、年齢からの疑問点を述べた。17.7節では、「淡路」でヒットしたのは、仲哀天皇紀から允恭天皇紀である。

表 XI07 景行天皇紀に現れる地名(日本武尊)での考察に補足すれば、応神天皇紀から允恭天皇紀までの間に吉備から河内への東遷が扱われ、これ以降に大和への(征服と)遷都が行われた(%% 結合)と考えている。淡路の検索結果はこれに符合している。

履中天皇・反正天皇と仲皇子など王位をめぐる抗争が書かれている。

履中天皇紀では、前文で仲皇子との抗争の話(%%もう少し)で、河内國埴生坂で難波を望んだ後、大坂より倭に向かい、飛鳥山にいたった。ここで、淡路野嶋の海人が現れる。

即位は桜井市(磐余稚櫻宮)、桜井市での事蹟が書かれた後、淡路嶋で狩猟をし、稚櫻宮で崩御となっている。

反正天皇紀では、前文に初生干淡路宮と書かれている。誕生時には、皇后の磐之媛命はここに居たことになり、仁徳天皇も同様と思われるが、この記事は見つかっていない。

松原市(柴籬宮)に遷都した。正寢で崩御。

允恭天皇紀では、前文と即位時には遷都の記事がないことから、即時の宮は松原市(柴籬宮)と考える。檀原市(藤原)と茅渟に数回行幸した。ここで、幸茅渟宮と幸茅渟が用いられている。淡路嶋で狩猟をした。崩御地は記されていない。

安康天皇紀と雄略天皇紀

表 21.14. ・安康天皇紀と雄略天皇紀に現れる地名

安康天皇	穴穗天皇		
前文	12月	穴穗皇子即天皇位 則遷都于石上 是謂穴穗宮	天理市
3年	8月	天皇爲眉輪王見弒(辭具在大泊瀨天皇紀) 三年後 乃葬菅原伏見陵	奈良市
雄略天皇 大泊瀨幼武天皇			
前文	11月	天皇命有司設壇於泊瀨朝倉即天皇位 遂定宮焉	桜井市
2年	10月	幸于吉野宮	
4年	2月	天皇射獵於葛城山	御所市・千早赤阪村
	8月	行幸吉野宮…因讚蜻蛉 名此地爲蜻蛉野	川上村
5年	2月	二月 天皇狩獵于葛城山	
	6月	婦果如加須利君言 於筑紫各羅嶋産兒 仍名此兒曰嶋君	
6年	2月	天皇遊乎泊瀨小野	桜井市
	4月	吳國遣使貢獻	
7年	7月	或云 菟田墨坂神也	宇陀市
8年	2月	高麗王即發軍兵 屯聚筑足流域 (或本云 都久斯岐城)	
9年	3月	天皇欲親伐新羅 (身狹村主青が絡む記事)	
13年	8月	播磨國御井隈人文石小麻呂有力強心…	姫路市
14年	正月	…將吳所獻手末才伎漢織 吳織及衣縫兄媛 弟媛等 泊於住吉津	大阪市
	是月	爲吳客道通磯齒津路 名吳坂	大阪市
	3月	三命臣連迎吳使 即安置吳人於松隈野 因名吳原 以衣縫兄媛奉大三輪神 以弟媛爲漢衣縫部也	明日香村
16年	7月	詔宜桑國縣殖桑 又散遷秦民使獻庸調	
17年	3月	土師連祖吾筭仍進擲津國來狹狹村 山背國內村 俯見村 伊勢國藤形村及丹波 但馬 因幡私民部 名曰贄土師部	能勢町・伏見(?)
22年	7月	丹波國餘社郡管川人水江浦嶋子乘舟而釣…	与謝郡伊根町
23年	7月	天皇疾彌甚 與百寮辭訣 並握手歔歔 崩于大殿 …是時 征新羅將軍吉備臣尾代行至吉備國過家 後所率五百蝦夷等 聞天皇崩…更追至丹波國浦掛水門 盡逼殺之	京丹後市

安康天皇紀では天理市で即位したあと、遷都の記事は無い。

安康天皇の在位期間は3年と短い。宮と陵は若干の疑問が残る。

雄略天皇紀では、桜井市で檀を設け即位、吉野宮に行幸し、葛城山で狩猟、呉使を大阪市(住吉津)に宿泊させ、明日香村に安置、大殿にて崩御。線との記事がないことから、泊瀬朝倉宮か。

雄略天皇紀地名の順序は逆のほうが本稿には合い易いのではないかとにかくかなりの地名が現れる。

次の清寧天皇紀とともに檀を設け即位を行っている。これは何か意味があるだろうか。雄略天皇が倭の五王の1人(本稿では興としている)であることの傍証とはならないか。これは、宋書世祖大明六年462の記事と日本書紀雄略天皇六年461より得た作業仮説10.1による。

「おもしろそう紀」というサイトが見つかった。

第一部 謎の四世紀 <http://omoshirosoki.com/index.html#TOP>

第一章 斯麻宿禰・第二章 神日本磐余彦・第三章 椎根津彦

第四章 御間城入彦五十瓊殖と伊香色雄・

第二部 謎の五世紀 <http://omoshirosoki.com/wao.html#c>

第一章 気長足姫

第二章 倭王武の時代β http://omoshirosoki.com/wao/bsoki2_2.html

第三章 大鷦鷯

という構成になっている。興味ある視点も見られるが、引用を除いた部分は本稿より長いかもしれず、存在の記録に留めておく。

清寧天皇紀・顯宗天皇紀・仁賢天皇紀

表 21.15. 清寧天皇紀・顯宗天皇紀・仁賢天皇紀に現れる地名

清寧天皇	白髮武廣國押稚日本根子天皇（白髮天皇）	
元年	正月 命有司 設壇場於 磐余甕栗 陟天皇位 遂定宮焉	橿原市
	10月 葬大泊瀨天皇于丹比高鷲原陵	羽曳野市
2年	2月 天皇恨無子 乃遣大伴室屋大連於諸國 置白髮部舍人 白髮部膳夫 白髮部鞠負 冀垂遺跡令觀於後	
	11月 依大嘗供奉之料 遣於 播磨國 司山部連先祖伊與來目部小楯 於 赤石郡 縮見屯倉首忍海部造細目新室 見市邊押磐皇子子億計 弘計	三木市
5年	正月 天皇崩于宮 時年若干 11月 葬于河内坂門原陵	羽曳野市
顯宗天皇	弘計天皇（更名來目稚子）	前文殆ど理解できず
前文	…避難於 丹波國 余社郡…從茲遁入 播磨國 縮見山石室而自經死…勸兄億計王向 播磨國 赤石郡	三木市
	白髮天皇五年十一月 飯豐青尊崩 葬葛城埴口丘陵	葛城市
元年	正月 …乃召公卿百僚於 近飛鳥八鈞宮 即天皇位	明日香村
	3月 幸後苑曲水宴	
3年	3月 幸後苑曲水宴	
	4月 置 福草部 皇崩于八鈞宮	明日香村
	是歲 紀生磐宿禰跨據 任那 交通高麗將西王三韓整脩宮府 自稱神聖 用任那左魯那奇 他甲肖等計殺百濟適莫爾解於爾林（爾林高麗地也）築帶山城 距守東道 斷運糧津令軍飢困	
仁賢天皇	億計天皇（更名大爲）	前文殆ど理解できず
元年	皇太子於石上廣高宮即天皇位	天理市
	10月 葬弘計天皇于 傍丘 磐杯丘陵	香芝市
6年	是歲 日鷹吉士還自 高麗 獻工匠須流枳 奴流枳等 今倭國 山邊郡 額田邑熟皮高麗 是其後也	大和郡山市
11年	8月 天皇崩于正寢 十月 葬埴生坂本陵	藤井寺市

清寧天皇紀では、檀原市で檀を設け即位羽曳野市の宮で崩御。遷都の記事は？

Wikipedia「与謝郡」余社郡

与謝郡は、京都府(丹後国)の郡。地名としてのよさは雄略天皇 22 年に餘社郡で初見される。入江の見られる郡域において、湾でのよせあみ(寄網)漁法がよさみ、そしてよさへ転訛したものである。7 世紀に丹波国の与射評として設置された。701 年に評が郡になり、713 年に丹後国が設置されるとこれに属した。

顯宗天皇紀では、前文で、播磨國縮見山石室(三木市)播磨國赤石郡(三木市)が書かれている。

ジャパンナレッジ | 日本歴史地名大系・国史大辞典「明石郡」

日本書紀の神功皇后摂政元年二月条に■坂王・忍熊王らが天皇のためと偽り、山陵を赤石に作るとあり、允恭天皇一四年九月一二日条には赤石の海底に真珠があり、その珠を祀ればことごとく獣を得るとみえる。歴史的に確実な記載としては、同書推古天皇一一年七月六日条に征新羅將軍当麻皇子に「従う妻舎人姫王、赤石に薨ず。よりて赤石の檜笠岡の上に葬る」とあり、大化二年(六四六)正月一日条、いわゆる大化改新詔において畿内国の範囲を定めた際、「西は赤石の櫛淵よりこのかた」とあるのはよく知られている。同書清寧天皇二年一一月条に「赤石郡の縮見屯倉の首、忍海部造細目が新室にして、市辺押磐皇子の子億計・弘計を見でつ」とあり、この赤石郡は

顕宗天皇の即位前紀にもみえるが、ともに郡の呼称は「日本書紀」編纂時の知識による潤色であろう。しかし前述の推古天皇一一年紀の赤石の檜笠岡が賀古郡内に比定され、縮見屯倉の所在地の志染（現三木市）が美囊郡であること、後述する海直の存在や明石国造の伝承などを合せ考えると、律令制以前にアカシとよばれた地域（明石国）が明石郡はもとより賀古郡・美囊郡にまで広がっていたことが想定できる。県下最大の前方後円墳である垂水区五色塚古墳が五世紀初めに造営されているのも、こうした背景を基盤としたものにほかならない。「播磨国風土記」にも赤石郡がみえるが、当郡の条文を欠いている。

仁賢天皇紀で陵以外の地名は、天理市の石上廣高宮と山邊郡額田邑熟皮高麗である。平群郡額田郷があるが。共に大和郡山市であるがかなり離れている。

Wikipedia「山邊郡」：奈良市の一部(都祁馬場町・荻町以南・月ヶ瀬嵩)、大和郡山市の一部(新庄町)、天理市の大部分(櫟本町・和爾町・檜町・森本町・蔵之庄町・中之庄町・柳本町・渋谷町・檜垣町・遠田町・海知町・武蔵町を除く)、桜井市の一部(修理枝)、宇陀市の一部(室生三本松・室生大野・室生向淵以北)、山添村の大部分(室津・松尾・桐山・峰寺・的野・北野を除く)

(新庄町西名阪天理 IC と郡山下ツ道 JCT 中間南)

Wikipedia「大伴室屋」

大伴 室屋'(生没年不詳)は、古代日本の豪族。姓は連。一般に流布している系図では大伴武以(武持・健持)の子とされるが、世代は合わない。ほかに、武以と室屋の間

に2-3代を記す系図もある。子に談・御物がいたとする系図がある。佐伯連・佐伯宿禰の祖。

允恭天皇から顕宗天皇まで5代の天皇に大連として仕えた。允恭天皇(仁徳天皇の皇子)の代、妃の衣通郎姫のために藤原部を定める。雄略天皇2年、百済の池津媛を犯した石川楯を、来目部に命じて処刑させる。同23年8月、天皇崩御に際して後事を託され、直後に起こった星川稚宮皇子の叛乱を東漢掬と共に鎮圧。清寧天皇2年には、諸国に天皇の御名代として白髪部舎人・膳夫・靱負を置いた。武烈天皇3年天皇の詔に従い、役丁を徴発して城の形を水派邑(現在の奈良県河合町か)に築いた(ただし、これは金村の事績とすべき)。

吉備の東を播磨としたではないか。この頃までに播磨が倭王朝の支配下になった。支配したのは吉備王朝。吉備王朝が播磨まで進出した。

武烈天皇紀と繼體天皇紀

表 21.16. 武烈天皇紀と繼體天皇紀に現れる地名

武烈天皇	小泊瀬稚鷦鷯天皇	
前文	於是太子命有司設壇場於泊瀬列城 陟天皇位 遂定都焉	桜井市
3年	11月 詔大伴室屋大連 發言濃國男丁 作城像於水派邑 仍曰城上也 是月 百濟意多郎卒 葬於高田丘上	河合町 羽曳野市:大和高田市
8年	12月 天皇崩于列城宮	桜井市
繼體天皇	男大迹天皇	
前文	近江國高嶋郡三尾之別業 遣使聘于三國坂中井 余歸寧高向 (高向者 越前 國邑名) 今足仲彦天皇五世孫 倭彦王 在丹波國桑田郡	
元年	天皇行至樟葉宮	枚方市
2年	10月 葬小泊瀬稚鷦鷯天皇于傍丘磐杯丘陵 12月 南海中耽羅人初通百濟國 (日本列島からは西海)	藤井寺市
3年	2月 遣使于百濟 括出在任那日本縣邑百濟百姓浮逃絶貫三四世者並遷百濟附貫也	
5年	1(遷都山背筒城	京田辺市
6年	1(百濟遣使貢調 別表請任那國上□□ 下□□ 娑陀 牟婁四縣	
7年	6(百濟遣姐彌文貴將軍 洲利即爾將軍 副穗積臣押山 貢五經博士段楊爾 別奏云 伴跋國略奪臣國己□之地 伏請 天恩判還本屬 11月 於朝庭引列百濟姐彌文貴將軍 斯羅□得至 安羅辛已奚及貴巴委佐 伴跋既殿奚及竹□至等 奉宣恩勅 以己□帶沙賜百濟國	
8年	3(伴跋築城於子吞帶沙 而連滿奚 置烽候邸閣 以備日本 得築城於爾列比 麻須比	
9年	2月 是月 到于沙都嶋 傳聞 伴跋人懷恨御毒 恃強縱虐 故物部連率舟師五百 直詣帶沙江 文貴將軍自新羅去	
12年	3月 遷都弟國	長岡京市
20年	9月 遷都磐余玉穗 (筑紫國造磐井陰謀叛逆と百濟・新羅))	桜井市
25年	2月 天皇崩于磐余玉穗宮 時年八十二 12月 葬于藍野陵	茨木市

武烈天皇紀では、泊瀬列城(桜井市)で檀を設け即位し、またここで崩御した。水派邑(河合町)で城を造らせた。

命有司設壇場於・・・陟天皇位

と書かれているのは雄略天皇紀(陟が即)・清寧天皇紀・武烈天皇紀。

顕宗天皇・仁賢天皇は和風諡号が弘計・億計で漢風っぽい。

継体天皇紀で、奈良県の地名は 20 年に遷都した桜井市で、河内は武烈天皇の陵のある藤井寺書のみである。その他は、木津川・淀川沿岸に位置する。20 年の磐余玉穗遷都以降の記事は朝鮮半島関連の記事が主である。吉備・九州・大陸への通行は海路がメインと思われ、これには淀川沿岸のほうが便利と思える。対外記事には都の位置はあまり関係ない。

21.4. 継体天皇紀までに現れる朝鮮の国名

地名の多くは戦闘記事に書かれている。これは、物語的記述で理解が困難で、とばしてきた。

韓・新羅・百済・高麗・任那・加羅に加えて呉で検索してみた。ヒットしない天皇紀には朝鮮の地名は書かれていないであろう、ということから、ヒットの多い天皇紀から、ぼちぼち、手を付けていくことにする。

表 21.17はこの結果である。(以後、紀を省くこともある。)

表 21.17. 韓 新羅 百済 高麗 任那 加羅・呉での検索

	神武天皇	開化天皇	崇神天皇	垂仁天皇	景行天皇	成務天皇	仲哀天皇	神功皇后	應神天皇	仁徳天皇	履中天皇	反正天皇	允恭天皇	安康天皇	雄略天皇	清寧天皇	顯宗天皇	仁賢天皇	武烈天皇	継体天皇
韓	×	○	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○	
新羅	×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○
百済	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○
高麗	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	×	○	○	×	○
任那	×	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○
加羅	×	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
呉	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×

ヒットするかしないかを見た結果で、回数と内容は考慮していない。

全てにヒットしたのは、応神天皇紀。1つ足りないのが、神功皇后紀・雄略天皇紀・継体天皇紀で、2つ足りないのが仁徳天皇紀・顯宗天皇紀である。

全てがヒットしないのは、神武天皇紀から開化天皇紀と景行天皇紀・成務天皇紀・履中天皇紀・反正天皇紀・安康天皇紀で、1つだけヒットしたのが、仲哀天皇紀・允恭天皇紀・清寧天皇紀・武烈天皇紀である、
呉でヒットしたのは、応神天皇記・仁徳天皇紀・雄略天皇記である。

神功皇后紀で、是所謂之三韓也・海西諸韓という用法があった。唐と同じ
用い方で、(記紀編纂時では、)朝鮮半島南部の国々を諸韓国と呼んでいた
のであろうか。

新羅人○○などで、国内記事がかなりある。これは、朝鮮からの移民(難
民)がかなりいたことを示しているのではないか。また、住まうところも
指示している記事もあり、倭国の配下となり、倭国の勢力拡大に寄与した
はずである。

以下で朝鮮半島の国名・地名を抜き出してみた。

表 21.18. 崇神天皇紀から神功皇后紀に現れる朝鮮の国名・地名

崇神天皇紀

- 65 任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也 任那者 去筑紫國二千餘里
北阻海以在鷄林之西南

垂仁天皇紀

- 2 是歲 任那人蘇那曷叱智請之 欲歸于國
對曰 意富加羅國王之子 名都怒我阿羅斯等
88 朕聞 新羅王子天日槍初來之時 將來寶物今有但馬

仲哀天皇紀

- 8 是謂栲衾新羅國焉

神功皇后紀

- (10) 便到新羅・・・是所謂之三韓也。皇后從新羅還之
5 新羅王遣汗禮斯伐毛麻利叱智富羅母智等朝貢
(39- 魏志云 明帝景初三年 40正始元年 43正始四年)
46 遣斯摩宿禰于卓淳國・・・時百濟肖古王
47 百濟王使久氏 彌州流 莫古 令朝貢
時新羅國調使 與久氏共詣
49 至卓淳國 將襲新羅
50 荒田別等還之 千熊長彦 久氏等 至自百濟

崇神天皇 65 年の記事は 9.1 節で扱った。デジタル大辞泉の解説では、鷄林は新羅の事とある。また、これは脱解王に関する逸話とされている。脱解王は昔王朝の初代王であることから、昔王朝の都となる。一方、記事からは、その位置は釜山辺りで、金王朝と考えられる。

地図から、朝鮮半島の釜山に近い島としては、巨濟島が浮かんでくる。この位置は、倭国の最南端といってもおかしくない。任那は倭奴国の後裔ではないか。倭王が朝鮮半島に居たときは、倭(連合王国)に加わっていた

が、倭の移住後は離れたが、友好関係は維持された。

表 21.19. 応神天皇紀から允恭天皇紀に現れる朝鮮の国名・地名

応神天皇紀

- 7 高麗人 百濟人 任那人 新羅人 並來朝
- 8 百濟人來朝、枕彌多禮 口南 支侵 谷那（東韓の地）
- 14 是歲 弓月君自百濟來歸因以奏之曰
- 15 百濟王遣阿直岐 貢良馬二匹 即養於輕坂上厩
- 16 王仁來之 則太子菟道稚郎子師之 是歲 百濟阿花王薨・・・
仍且賜東韓之地而遣之 東韓者 甘羅城 高難城 爾林城是也
平群木菟宿禰 的戸田宿禰於加羅
- 20 阿知使主 其子都加使主 並率己之黨類十七縣
- 28 高麗王遣使朝貢 因以上表・・・時太子菟道稚郎子讀其表
- 37 遣阿知使主 都加使主於吳 令求縫工女
- 39 百濟直支王 遣其妹新齊都媛以令任
- 40 阿知使主等自吳至筑紫 時胸形大神有乞工女等・・・

仁徳天皇紀

- 11 是歲 新羅人朝貢 則勞於是役
- 12 高麗國貢鐵盾 鐵的、饗高麗客於朝
- 17 新羅不朝貢 遣的臣祖砥田宿禰 小泊瀬造祖祖賢遺臣 而問闕貢之事
- 41 遣紀角宿禰於百濟 始分國郡場 具録郷土所出
- 58 吳國 高麗國並朝貢

允恭天皇紀

- 3 遣使求良醫於新羅

景行天皇紀と成務天皇記ではヒットしなかった。

表 21.20. 雄略天皇紀・顯宗天皇紀に現れる朝鮮の国名・地名

雄略天皇紀

- 5 百濟加須利君(盖鹵王也) 飛聞池津媛之所燔殺
- 6 吳國遣使貢獻
- 8 遣身狹村主青 桧隈民使博徳使於吳國
- 9 天皇欲親伐新羅 神戒天皇曰
- 10 身狹村主青等將吳所獻二鵝到於筑紫
- 11 有從百濟國逃化來者 自稱名曰貴信 又稱。貴信吳國人也
- 12 身狹村主青與桧隈民使博徳出使于吳
- 14 身狹村主青等共吳國使 將吳所獻手末才伎漢織 . . .
是月 爲吳客道通磯齒津路 名吳坂 . . .
即安置吳人於桧隈野 因名吳原
- 20 高麗王大發軍兵 伐盡百濟
- 21 天皇聞百濟爲高麗所破
- 23 百濟文斤王薨 天皇以昆支王五子中 第二末多王 . . .
- 24 是歲 百濟調賦益於常例 筑紫安致臣 馬飼臣等 . . .

顯宗天皇紀

- 3 阿閉臣事代銜命 出使于任那
是歲 紀生磐宿禰跨據任那 交通高麗將西王三韓整脩宮府

表 21.21. 武烈天皇紀・繼體天皇紀に現れる朝鮮の国名・地名

武烈天皇紀

- 3 百濟意多郎卒 葬於高田丘上
- 4 百濟末多王無道 暴虐百姓 國人遂除而立嶋王 是爲武寧王
- 6 百濟國遣麻那君進調 天皇以爲 百濟歷年不脩貢職
- 7 百濟王遣期我君進調 別表曰

繼體天皇紀

- 2 南海中耽羅人初通百濟國
- 3 遣使于百濟
- 6 百濟遣使貢調 別表請任那國上□□ 下□□ 娑陀 牟婁四縣
- 7 百濟遣姐彌文貴將軍 洲利即爾將軍 副穗積臣押山 百濟太子淳陀薨於朝庭引列百濟姐彌文貴將軍
- 8 是月 伴跋國遣口支 獻珍寶乞己□之地 而終不賜國
- 8 伴跋築城於子吞帶沙 而連滿奚 置烽候邸閣
- 9 百濟使者文貴將軍等請罷物部連於帶沙江停住六日 伴跋興師往伐 逼脫衣裳劫掠所賚
- 10 百濟遺州利即次將軍副物部連來謝賜己□之地 百濟遺灼莫古將軍 日本斯那奴阿比多 副高麗使安定等
- 17 百濟國王武寧薨 18 百濟太子明即位
- 21 近江毛野臣率衆六萬 欲往任那爲復興建新羅所破
- 23 百濟王謂下□□國守穗積押山臣曰 任那王己能末多干岐來朝 是月 遣使送己能末多干岐并
- 24 任那使奏云 調吉士至自任那 奏言

あとがき

本章では、まず、表 21.2 から表 21.21 までを作成した。作成してみたものの、どう扱っていいのかのアイデアは全く浮かんでこなかった。神武東征の考察で、古事記の対応する記事を用いた。記事の内容の若干の差の他に、人名・地名の漢字表記にも少なくない差が目についた。この漢字表記が一致するかしないかから何か得られないかと思って調べたことが、21.1 節と 21.2 節である。ここで、古事記からも同様の表を作成するか、日本書紀の表に追加するのが流れであるが、日本書紀の結果と対応させる作業が必要で、古事記は記年体でないため、作業量は相当なものになりそうで、踏み切れずにいる。これは、ぼちぼち手を付けてことにする。

ということで、問題提起もあまりできていないが、これまでの結果を投稿することにした。

本稿で扱った正史は漢文と呼ばれている。

コトバンク「漢文」ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説では、古代の漢民族において発達し、現代まで伝承されている漢字による文字言語およびそれで書かれた言語作品。漢文は朝鮮，日本，安南にまで広まり，使用され，言語作品が作成された。日本には，古く大陸からの渡来者がもたらしたが，次第にその外国語である中国語に返り点，送りがなをつけ，日本語文語文に翻訳しながら読む訓読

法が発達し、固定化するようになった。外国の文字言語を自国の文字言語として機能させる際の、一つの独特のやり方である。

百科事典マイペディアの解説では、

漢代の文章の意だが、日本では中国語の語法によって漢字ばかりで書かれた文章の総称。広義には日本語を混じた（ただし漢字のみ）文をも含む。おそらく4—5世紀ごろ輸入された漢文は日本文化の源泉の一つであり、書記活動は漢文を借りて行われた。漢文の読み書きができることが古代貴族・官吏の教養とされた。朝廷の公式の文章には漢文が用いられ、それが変体漢文という文体を生み出した。また漢文の日本語直訳すなわち訓読が行われ、漢文訓読体という日本語の文体を生み、さらに和漢混淆文を生ずるに至る。

と書かれている。

ここで、漢文は古代中国語とすべきではないかと思ったが、改めて考えると、今のほぼ中華人民共和国の地域を中国と呼ぶのは適切かどうか疑問になってきた。古くは、漢・呉・隋・唐などが中国を指す言葉として用いられてきた。この他に、支那という呼称も使われてきた。

SEIKOの電子辞書のデジタル大辞泉「支那」では、秦が西方に伝わりそれが変化したものという、外国人の中国に対する古い呼び名。

また、同広辞苑「支那」では、秦の転訛。外国人の中国に対する呼称、初めインドの仏典に現れ、日本では江戸時代中期以降第二次大戦末まで用いられた。戦後は支那の表記を避けて多くシナと書く。

と書かれている。英語名の China に近い発音である。世界基準に合わせるといふ立場からは、支那と呼ぶのが自然かもしれない。

中華という用語もある。これは中国(人)の自称に用いられていると思われる。中華料理・中国料理では中華料理のほうが馴染む。かって、中国は中華〇〇国のキセル的省略と思ったことがある。

ちんぷんかんぷんを珍文漢文と思ってきたが、違って、珍紛漢紛のようである。(語源由来辞典「ちんぷんかんぷん」)

正統な漢文という用語を何処かで見た記憶がある。正統でない漢文とは何か。恐らく、中国語と言えるものと言えないもの。中国語といえないものは、文法に合っていないものと訓読みを伴うものが考えられる。規則的と規則正しいのように、正(正しい)を付けた用語が多く見られる。不規則は、規則的でないではなく、規則正しくではないという意味のようである。

テレビを見ていて、‘ハングルはわからない’と言っているのを聞いた。ハングルならば読めないのではないかと考える。ハングルはもともと朝鮮語を表記するために考案されたものである。英語ではアルファベットに相当する。言った人の真意は‘朝鮮語はわからない’ではないかと思う。

‘外国では’あるいは‘海外では’といったときに、米英仏独伊辺りで南米・アフリカなどは念頭においていないであろう。